

生活用品の収納までも、美しく見せる人たちがいる。

仕事と生活を自宅で両立させる2人に学ぶ収納の知恵と工夫。日々の暮らしを助けてくれる、目にも美しい収納術とは。
撮影・三東サイ 文・寺田和代



1 玄関脇の腕時計置き場。洋服に合わせ、出がけにサッと選べる。2 本は色別に並べる。青と赤の世界。3 クリップ類は自分で塗った白いカゴに。4 過去作品や参考商品はオーダーメイドの白い箱に保管。5 カイロなど外出時に使う消耗品専用の箱。6 家族の小物などは各自の箱に入れ玄関正面に整然と。7 調理道具はシルバーと木で統一し、見せる収納に。8 冠婚葬祭グッズの箱。9 吊り戸棚下にサイズ違いの同じ鍋。10 使いやすいサイズで丈夫な『小川軒』の菓子箱にはアトリエのカード類。11 キッチンとダイニングを仕切るカウンター下の空間も、キッチン周りのものを籐カゴに入れて無駄なく。

「目に触れるところをすべて白にして、なるべく広くスッキリ見せる作戦を立てました。典型的な昭和の家も白いペインキを塗るとイメージが一変します」
おもなポイントは、白で統一、箱の活用、空間全体を効率よく使うこと。
「目に触れるところをすべて白にして、なるべく広くスッキリ見せる作戦を立てました。典型的な昭和の家も白いペインキを塗るとイメージが一変します」
江面さんの収納の考え方はここで暮らし始めて以来、一貫している。

「バッグ製作には材料、道具などたくさんのもが必要で、スムーズに作業を進めるには何がどこにあるかすぐにわかることが大切。もっと広い場所があればなあ、と常に思いながら、現状の中でどうするか考えて試行錯誤を繰り返し、今の形にたどり着きました」

「バッグ製作には材料、道具などたくさんのもが必要で、スムーズに作業を進めるには何がどこにあるかすぐにわかることが大切。もっと広い場所があればなあ、と常に思いながら、現状の中でどうするか考えて試行錯誤を繰り返し、今の形にたどり着きました」

古いから、狭いから、モノが多いから、ウチは美しい収納なんて無理、という嘆きがいかに思い込みか。教えてくれるのはバッグ作家の江面旨美さんだ。
3 人家族の自宅兼アトリエは敷地面積28坪、築約40年の建売住宅。過去に2度、小規模なリフォームを施した以外は、夫婦でのDIYに自身の細かな工夫を重ね、限られた空間を住まいとアトリエとに分け、どちらも快適に使える場を作り上げてきた。

限られた空間を“白”と“箱”で最大限に広く使いやすく。
江面旨美さん バッグデザイナー



夫婦2人でペンキを塗った玄関脇の白い階段。40年前の昭和レトロな印象が、シンプルモダンな洋風に一変。



キッチンとダイニングを仕切る薄いカウンターの、ダイニング側には黒田泰蔵さん作の器などをディスプレイ。



リビングの窓には白い陶器を4つ。背後の余白を美しく見せるためそれ以外のものは置かない。

リビング、空間とアトリエを帆布と書棚で世界を分ける。

1階はもともとDKと洋室、独立した洋室+1間大の押し入れ。壁と押し入れを撤去してキッチンとリビング、アトリエに。2つの世界は書棚と帆布で分け、白の高密度収納でスッキリ。

白で統一されれば箱の形やサイズがまちまちでもスッキリ。

天井、壁、棚はもちろん、ソファ、照明、家電、インテリアの置き物類まですべて白。何より驚かされるのは、アトリエでも住まいでもモノをしまうのに白い箱だけを使っていること。とくにアトリエは白い収納箱が天井まで積み上げられているにもかかわらず、圧迫感や狭さはほとんど感じない。効果は一目瞭然だ。

「圧迫感をなくすには、基調色を白にするのがいちばん。そこに木のブラウンや、キッチンでは道具類のシルバーを合わせています。白は汚れやすいと言われますが、アトリエで使う白い箱は、20年くらい前のものも今だにきれいですし、壁、階段、柱などは汚れたらペンキを塗り重ねれば味わいにもなります」



えつら・よしみ ● 建築事務所勤務を経て、バッグ作りをスタート。作品は半年ごとに個展「umami bags」で発表。著書に「umamiの帆布ワールド」。



リビングとダイニングのインテリアは白と木でまとめ、モダンで温かみのある空間に。仕切りやカーテンはすべて帆布で統一。

白に映える台所用品の用の美、掛けて吊るして空間をフルに。

リビングからキッチンを望む正面に、台所用品を見せる収納。白い壁のキャンバスに長年集めたザル類を掛け、シルバーカラーの調理用具を吊るす。茶、白、シルバーの3色が美しく調和。



「心を耕すため」、アート系の書籍を色ごとに並べる。

リビングとアトリエを仕切る深めの書棚。収める本は決まっていたので背表紙の色ごとに分類し、棚幅は固定。オーディオ類はここに収まるサイズの白。上部は帆布カーテンで開放感を演出。

玄関正面の箱には、中のもと持ち主の名を印字したラベルを。途中で内容が変わった部分は手書きです。



箱の収納術は道具や部品を整理して保管するためと、空間を最大限に利用するため。アトリエの窓側にさまざまな白い箱が整然と並ぶさまは壮観だ。

「いちばん上の大きな箱には過去の作品。アスクールで買ったものです。真ん中の箱はお客様にバッグを入れてお渡ししよう」とオーダーメイドしたもので、主にバッグの保管用。下の小さい箱には材料や道具類、伝票やDMなど。入っているものはラベルに書いて貼っています。白で統一されていれば箱のサイズや形がまちまちでも、並べるだけでスッキリ見えます」

紙の箱は処分する際も環境への負荷が小さい点が入っているそう。そして、掛ける、吊るすなどの収納を考える。たとえば棚にパイプを渡し、天井までの隙間に革など仕事の材料を置いたり、随所にフックやレールをつけて立体的に使うなど。

「(平面の) 広さが圧倒的に足りないことが常に課題でしたので、よくここまで工夫したな、とは思っています。一方で年齢とともに使い勝手も変わってきました。今後は椅子にのらなければ取れないような高い場所への収納は転倒リスクを考えて減らそうと。すでに箱などは少しずつ手放しているんです」



この秋の新作トートバッグ。潜水艦の窓みたいな飾りが楽しい。
<https://umamibags.net>